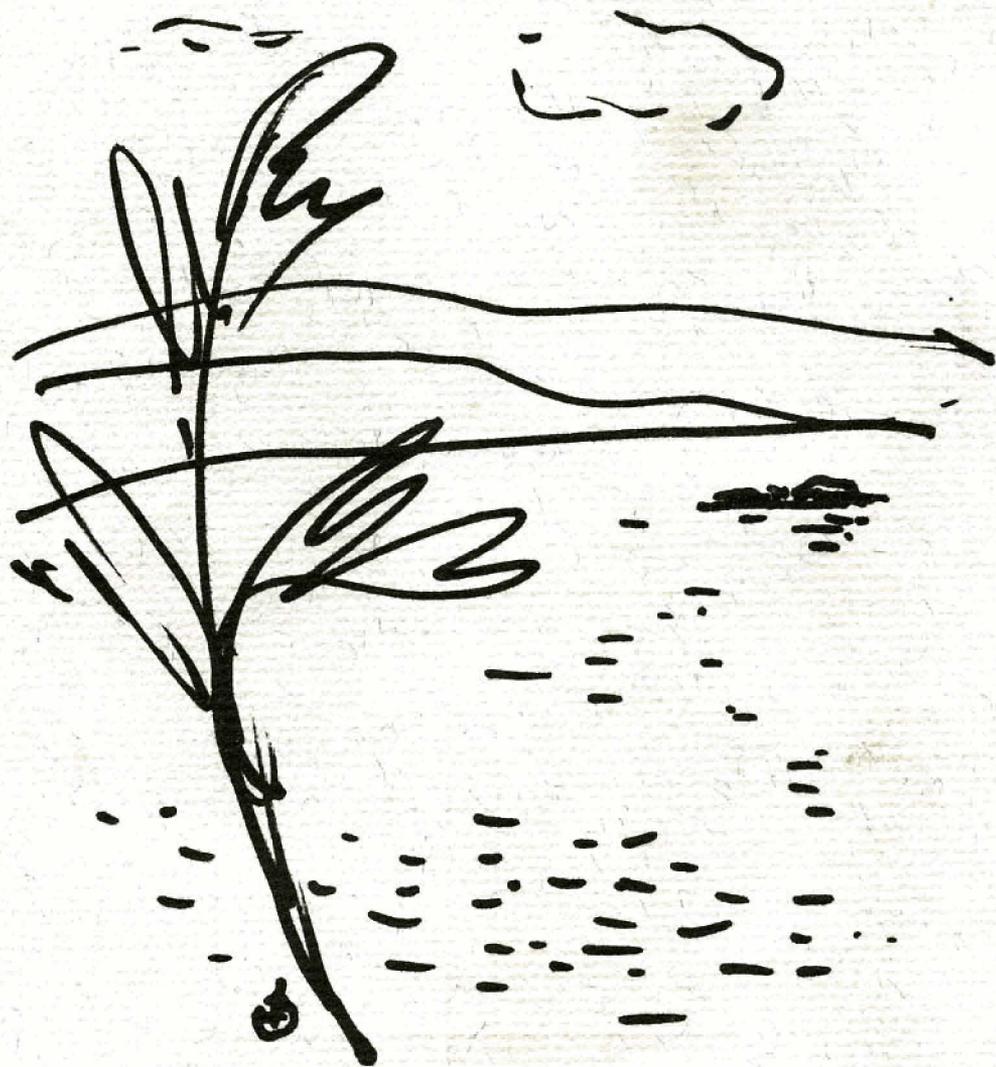


会報

昭和53年度



近畿双松会

挨拶

近畿双松会会長 永岡孝 二一

色々な都合で遅れて居た創立百周年記念式典が、北高の赤山復歸の祝典と共に愈々明年五月、二本松の下で挙行されることとなりました。

これで我々の後輩校たる松江北高の赤山復歸の念願が達成されたわけでありまして、赤山復歸期成同盟会及び北高当局の方々の此処まで持つて来られた熱意と御努力に対し深甚の敬意を表し度いと存じます。

尚、先般御寄附頂きました同窓会館の建設資金が若干の不足を来し、之が追加募金を同盟会及び北高当局より依頼がありましたので何分の御協力を御願申し上げますと共に、明年春の祝典には一人でも多く参加せられんことを期待して居ります。



完成間近い松江北高校（赤山）新校舎全景

寄稿

双松会一元論

大三 米村 又男

現在旧制松江中学の卒業生を以て組織する双松会と、新制松高北高の卒業生を以て組織する松高北高同窓会とがあつて、恰も新旧併立するかゝの觀を呈しているのは、誠に残念に思うものである。

ご承知のとおり、終戦後に進駐軍当局の教育指導によつて、所謂六三制と共に、男女共学制が採用せられることになつて旧制五箇年

の中学校が、中等科三年、高等科三年の六年制に、つまり修業年限一年延長の高等学校に

昇格したのであるが、ルーツ（始祖）は旧制中学そのものであることは否定できない。そして共学制に伴つて従來の女子中等校は、すべて男子中等校に吸収合併され、これが新制高校に昇格したものと見るべきであらう。

つまり昔時、大学と云う名の私立高等専門学校が、大正九年大学令の施行と共に、すべて修業年数を延長して大学令による大学に昇格したようなもので、これらの大学は既に社会的に名声を馳せ多数の実力者を輩出して、たから、そのルーツは尊重され同窓会が新旧

二元化するような事なしに、和やかに一体化して來ている。

今や松江北高は松江中学百年の歴史の伝承者として天下に宣明し、更に紅陵双松樹下に校舍を復帰することにより名実共に旧制松江中学の遺跡を継ぐ宗家の嗣子を以て任じているものと見ることが出来る。なお松江南高は宗家の次男として分家創立したもので、先祖を同じうする一族ではあるが、分家は当然傍系と見るべきであらう。

そこで北高が真に旧制松江中学をルーツとして百年の歴史を伝承するものであるならば、前述大学の例に見られるように、その同窓会



は新旧渾然一体化して然るべきであろう。とは云つても各年度別のクラス会を催すことがあるように、新旧或は男女別に部会的集會を催すことは何等差支ないことである。たゞ少くとも年次大会と云つた全体会は統一會名の下に一元化された全員の會でありたいものと思ふ。會名には双松が良からうと思ふが、旧制に偏するとせば紅陵ではどうだろう。

もと／＼双松会は年々會員数が減りゆく一方で、遂には衰滅の運命にあり、北高同窓會は前途洋々なのは理の当然である。私は明治四十二年（一九〇九）に入學したから今年で六十八年の昔になるが、五箇年間校長西村先生の薰陶を受け得た倅せ者である。

われらの母校旧制松江中学は全国でも数少い古い中学校であり、梅謙次郎、若槻礼次郎、岸清一氏らの偉材を生んだ天下の名門校又どん／＼落第させる県下の有名校であつたことは双松會員の誇りでもあつたと思ふ。

こゝで双松會の來歴に觸れておくならば、大正の末期か昭和の初頭かに、当時東の花井

卓造弁護士と並び稱された西の雄、われらの大先輩四方田保先生（20期）が近畿地方の松中卒業生會を發起され、近畿双松會を創始せられたのであつた。毎年會合を催し相互の親睦を計つて來たが、戦時中休止されて自然消滅の形であつたのを、戦後近畿日本鐵道の副社長たりし永岡現會長の熱意により復活を見て今日の隆盛を來したものである。双松會の名稱は戦後各地に用いられているが、嚆矢は

前記四方田先生の筈である。尤も母校の二本松を双松と呼ばれたのは西村元校長の御作「赤山健兒の歌」に歌い込まれている懐しい言葉なのだが、現在松江北高では會誌も名簿も双松として、この赤山の亭々たる二本松をば精神教育のシンボル化せられているように思ふ。

斯く觀じ來れば、新旧、男女の別なく統合し、ルーツを旧制松江中学とする松江北高が百年の歴史を背負う宗家の御曹子として立つならば、その卒業生を以て組織する同窓會は謙虛に大同団結し、帰一され一元化されて然

るべきではなからうか。でなければ校歴百年を稱するのは、冷静に考えて非常識であり、戦後に出來た單なる校歴三十年の新設高校とすべきであろう。

願わくば、現在の松高北高同窓會はルーツを忘失することなく、大乗的見地に立つて、校歴百年が真実にして、何等僭稱でないことを実証されるよう深く望むものである。

（昭和52年9月稿）

四二期の動靜

大一一 唐渡 弘

近刊の會報には、會員の近況の動靜・隨筆の要請があるが、世の変遷、境遇の変化と共に、当然心境も自ら大いに異質なものになつて來た。

就中、地球生活の現象年齢満七十歳を數年超えて、肉体活動の衰えが一入目立つて來ると、人生掉尾の仕上げを將來の幾年かの歲月